

「主体的・対話的で深い学び」を実現する単元デザインの研究 ～単元を構想する2つの手法の開発と実践～

小長谷 直樹

京都府京田辺市立三山木小学校 校長

1 はじめに

令和2年度本格実施となった学習指導要領では、資質・能力の育成が大きな改革の柱となっており、そのために「主体的・対話的で深い学び」の実現が強く求められている。また、学習指導要領には「単元など内容や時間のまとまりを見通して」という記述が繰り返されており、単に1時間の授業改善ではなく、単元を通して子ども達にどんな力がついたのか、どのような姿が見られたかという視点での単元の改善が重視されている。

本校では、単元をいかにデザインし改善していくかに焦点を当て研究を進めてきた。その中で「単元構想シート」というツールが、単元をデザインし共有・評価する上でたいへん有効であった。また本校は大規模校のため、従来の授業研究会では40名以上の教員が同時に参観し、たいへんな「密」が生じる。それを避けるために考え出した「分散型授業研究会」という新しい授業研究のスタイルが、単元構想を評価し、教員の単元を見る目を鍛えていく上でも、たいへん効果的であった。

本レポートでは、単元を構想し研究するために特に効果の大きかった「単元構想シート」と「分散型授業研究会」について紹介する。

2 研究の歩み

1年次（平成30年度）：国語・算数・道徳

テーマ「創意ある授業づくり」・・・児童の「主体的な姿」を目指して

「目指す3つの学びの姿」の作成

2年次（令和元年度）：国語

テーマ「学びを実感できる対話のある授業」・・・児童の「対話的な姿」を目指して

全文シートの活用

「単元構想シート」の開発と活用 → 5

3年次（令和2年度）：国語

テーマ「主体的に学びを深める児童」・・・「深い学び」を目指して

単元構想シートの活用と改善 → 5

分散型授業研究スタイルの開発と実践 → 6

3 解決すべき課題

- ・テキストや友達の意見と関連付けて考える力が弱く、深い学びを実現する中で思考力等を伸ばしたい。
- ・宿題など与えられた学習課題にしっかりと取り組む児童は多いが、読書や学習への関心や有用感が低く、学びに向かう力を育んでいきたい。
- ・上述の課題を克服するためには、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善が重要である。そのためには、1時間の授業研究では限界があり、単元をどう改善するか、単元デザインの研究が必要であり、その手法を身に付けたい。
- ・新型コロナウイルス感染症の拡大の中で、40名以上の教員が同時に授業を参観すると「密」が避けられなくなる。大規模校において、どう感染防止対策を講じつつ授業研究を活性化するか。若手をはじめとする教員の授業力の向上を図りたい。

4 研究推進のための方策

国語科における単元構想シートの開発と実践、及び新たな授業研究スタイルの開発

- ・単元構想シートを活用し教材研究を行うことで、すべての教員に単元をデザインする力を付けていく。
- ・それによる授業実践を通して、「深い学び」を実現し、主体的に学びに向かう児童を育成する。
- ・研究授業を行う学年の教員が一つの単元の異なる時間の授業を公開し、他の学年の教員が分散して授業を参観する（参観する教員を10人程度にして「密」を避ける）。事後研ではジグソー学習の手法を活用し、各時間での子どもの学びを総合し、単元構想や指導者の手立てを検証していくことにより、教員一人一人の主体的な学びを促していく。

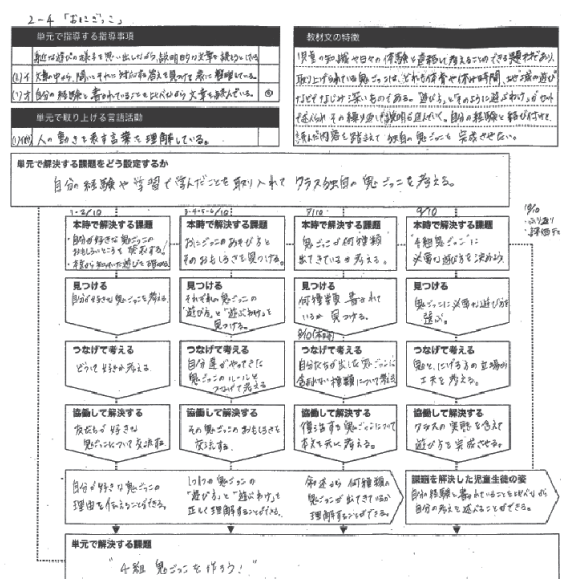
5 単元構想シート

5.1 単元構想シートの開発

シートの原型は、平成29年度京都府総合教育センター研究紀要第7集に掲載されている「国語科における『読むこと』の単元構想モデル」にある。これを基に令和元年3学期に各学年で教材研究のために活用したのが始まりである。

5.2 単元構想シート 作成の手順

- ① 学習指導要領で、単元で指導する指導事項を確認する。



- ② 教材文の特徴を分析する。
- ③ 単元で解決する課題を設定する。
- ④ 課題を解決した児童の姿を具体的にイメージする。(評価規準)
- ⑤ 単元を通した言語活動を設定する。
- ⑥ 課題を設定するための導入の工夫を検討する。
- ⑦ 単元での課題解決に向け、どのように学びを積み上げていくか検討する。

「本時で解決する課題」を設定する。

「見つける」言葉や文を明らかにする。

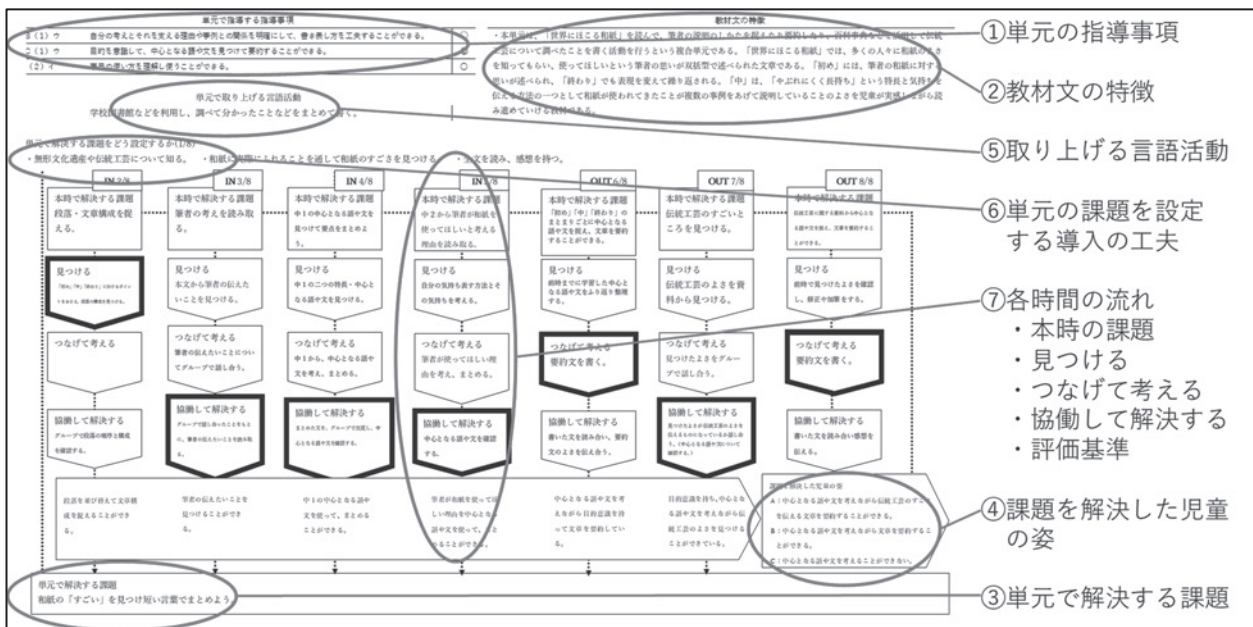
「つなげて考える」学習活動を設定する。

「協働して解決する」学習活動を設定する。

※ 本時で重点的に活動させる部分を太枠にする。 → 5.3

※ インプットとアウトプットの区別をつける。 → 5.3

※ 「目指す三つの学びの姿」とのつながりを考える。 → 5.3



R2・2 学期 ver.

5.3 単元構想シートの活用と改善

(1) 毎時の主たる活動の太枠表示【A】

単元全体を俯瞰して、この時間は「見つける」を主としよう、「協働して解決する」ことにたっぷり時間をかけようとして軽重をつけて計画するようになった。これにより1時間ごとの授業展開に余裕が生まれた。

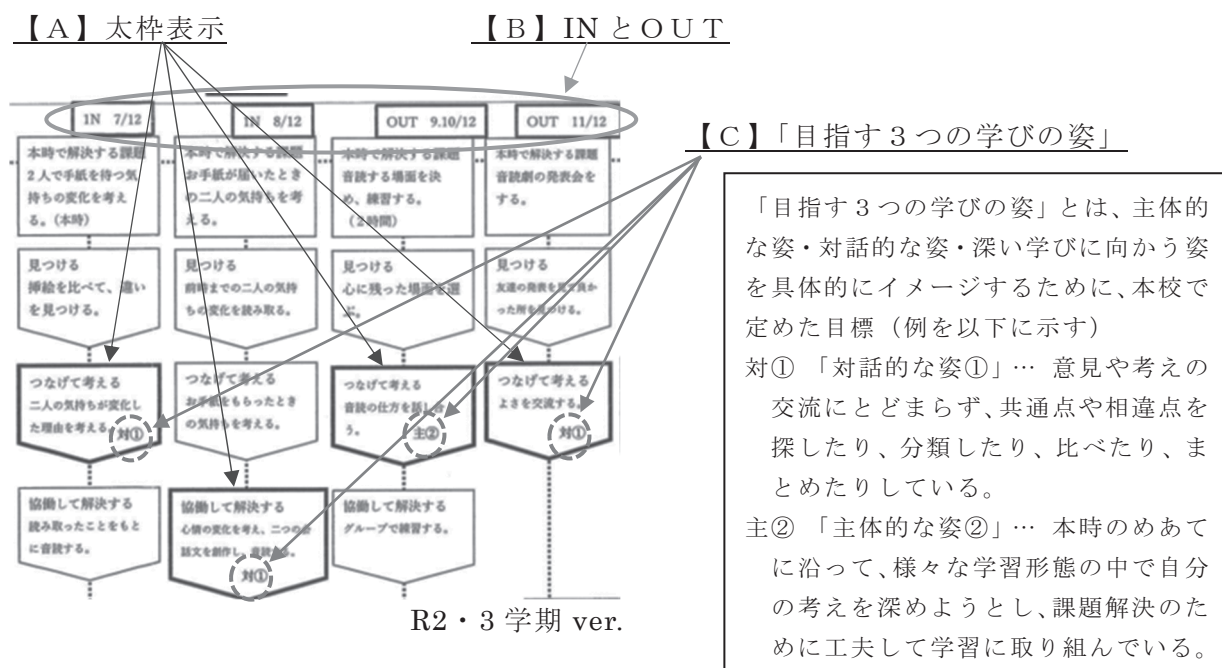
(2) IN と OUT の明示【B】

習得したことをどう活用させるかを意識するために、習得部分 (INPUT) と活用部分 (OUTPUT) を明示するようにした。これにより、活用するために、何を習得させておかな

くてはならないかが明確になった。単元全体を、習得と活用の関連を意識してデザインするようになった。

(3) 「目指す3つの学びの姿」の記入【C】

主たる活動の場面で、どのような児童の学びの姿を目標にするかを明示するようにした。これにより、「主体的・対話的で深い学び」を学びに向かう児童の姿で考えるようになった。



その他、「見つける」「つなげて考える」「協働して解決する」の流れを、各時間により焦点化して、「見つける」「つなげて考える」過程を省略し「協働して解決するだけの1時間にするなど、単元の特徴やデザインにより、シートを柔軟にアレンジしている。

6 分散型授業研究会

授業研究会での「密」を避けるために考案した、新しい授業研究スタイル「分散型授業研究会」は、単元デザインを研究する上で大きな効果を発揮した。

6.1 従来の授業研究会

- ・単元の中で本時にあたる1時間のみを公開する。
- ・全教員が本時に当たる1時間の授業を参観するため、1時間の中での児童の様子や本時の展開の評価・検討しか行われず、単元の構想にまで議論が広がらない。



（令和元年1月：教師約40名）

6.2 分散型授業研究会

- ・単元の各時間を各学級で分担し、単元全体を公開する（5～6時間の公開）。
- ・教員も分散して授業を参観する。
- ・単元のすべての授業を公開しているので、例えば「本時に当たる授業の課題解決には3時間目の授業がポイントになっていた」あるいは「単元で解決する課題に向かうためには、1時間目の導入が鍵になっていた」等、単元の各時間を関連付けて事後研が行われるようになった。（令和2年9月：教師約10名）



6.3 分散型授業研究会の準備

- ・学年で単元構想シートを作成し、次に公開する授業の計画表（通称：番組表）を作成する。各学級とも本時案を作成し公開するのは単元の中の1時間であるが、それ以外の授業も参観可としている。例えば14日に2組が行う4／8時の替わりに15日に3組あるいは4組で行われる授業を参観することもできるし、公開予定にない8／8時の授業を参観することもできるようにしている。
- ・各学年で、単元構想シートと公開する授業の計画表（番組表）を基に、公開されるA～Fのどの授業を参観するか分担する。

公開する授業の計画表（番組表）										
	8日	9日	10日	11日	14日	15日	16日	17日	18日	21日
1組	A 1/8 公開	2/8	3/8	4/8	5/8	6/8	7/8	8/8		
2組		1/8	2/8	3/8	D 4/8 公開	5/8	6/8	7/8	8/8	
3組			1/8	2/8	3/8	4/8	E 5/8 中心授業	6/8	7/8	8/8
4組		1/8	B 2/8 公開	3/8		4/8	5/8	6/8	7/8	8/8
5組	1/8	2/8	3/8	4/8	5/8		6/8	F 7/8 公開	8/8	
6組		1/8	2/8	C 3/8 公開	4/8	5/8	6/8	7/8	8/8	

6.4 分散型授業研究会の流れ

(1) 全体事前研の開催

単元構想シートを基に単元計画を説明する。

(2) プチ事前研の開催

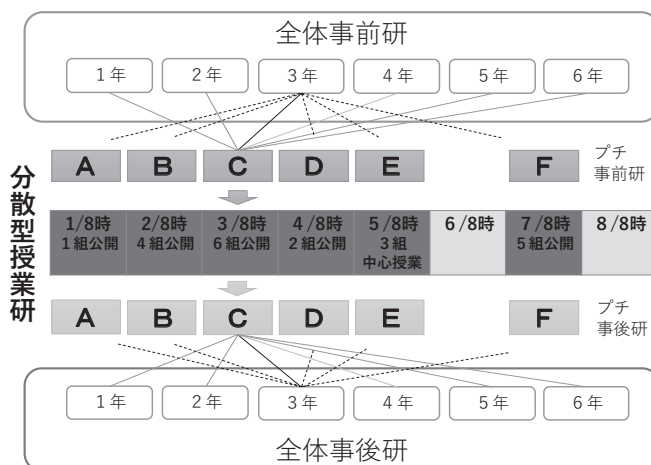
全体研後に各学年がA～Fに分かれ、参観する授業ごとに、その時間のねらいや展開について検討する。

(3) 分散型授業研究会

各学年の教員が、分散して授業を参観する。

(4) プチ事後研の開催

A～Fの授業ごとに、授業日に実施する。



(5) 全体事後研の開催

参観の視点に沿って学年ごとに協議する。その後、全体で交流する。

6.5 授業の総括

事後研を受けて、学年で単元構想シートに改善点を記入し、次年度の実践に生かせるようにする。実践を振り返り「研推だより」にまとめる。

7 成果と課題

(成果)

- ・単元構想シートは、教員の授業改善の意識を1時間の授業から単元全体へ転換する上で非常に有効であった。また分散型授業研究会は、単元の各時間を関連付けて評価・検討することができ、単元デザインを研究する上でたいへん有効であった。
- ・どんな資質・能力を育んでいくかを明確にして単元をデザインすることにより、各時間のねらいを焦点化し活動に軽重を付けて授業を展開できるようになってきた。その結果、話し合い等の活動に時間的な余裕が生まれた。2年ぶりに行われた令和3年度全国学力・学習状況調査では大きな伸びが見られ、主体的に学ぶ児童の姿が多く見られるようになった。
- ・全員が授業を行い、公開授業の参観も学年の代表として参加することで、教員一人一人の意識が高まり、教員にも主体的に学ぶ姿が多くみられた。若手教員も単元をデザインする手法を身に付けてきた。
- ・コロナ禍で、「密」を避けるために自粛しがちな授業研究会を、分散型にすることで大幅に活性化することができた。また、教室で参観する教員が少ないことで、児童もプレッシャーを感じることなく伸び伸び活動し、教員もグループの近くで児童の声をしっかり聞くことができた。

(課題)

- ・今年度は、国語科で行ってきた単元研究の成果を他教科に広げていきたいと考えている。研究は始まったばかりであるが、国語科のように明確な言語活動のない教科において、活用(OUTPUT)場面をどう設定するか等の課題が見えてきた。教科に応じて、使いやすい単元構想シートにさらに改善していく必要がある。
- ・今後評価と合わせて研究していきたいと考えている。構想シートの中で、課題を解決した時の児童の姿として評価規準を設定しているが、単元の中のどこでどんな方法で行うか等、さらに具体化していくことが必要である。

参考文献

針尾有章子、伴 昌也 (2017) 国語科における「読むこと」の単元構想モデルの開発
『京都府総合教育センター研究紀要』第7集